

# 見ようとしなければ見えないものがある

二〇二一年六月十六日

バイブル・サービス

氏 家 幸 子

今回は「見ようとしなければ見えないものがある」というテーマで、奈良県生駒市在中の映像作家、保山耕一さんのことをご紹介させていただきます。

私が保山耕一さんのことを知ったのは二〇一九年にNHKのEテレ「こころの時代」という番組でした。保山耕一さんですが、一九六三年生まれで、奈良の四季折々の風景を撮影されている映像作家の方です。

今はこんなゆつたりとした奈良の風景を撮っていらっしやいますが、八年ほど前までは、フリーランスのテレビカメラマンとして「THE 世界遺産」や「情熱大陸」など有名な番組数多くを担当し、世界中を飛び回っていた売れっ子カメラマンで、US国際映画祭でドキュメンタリー部門最優秀賞「ベスト・オブ・フェスティバル」を受賞するなど、日本のトップカメラマンとして第一線で活躍されていらっしやいました。

テレビ局のカメラマンは、東大、京大卒のエリート達が目白押しという世界。高卒でフリーの保山さんが彼らと争っていくには、圧倒的な実力を身につけるしかない。周囲はみなライバル。なんとその頃の睡眠時間は二時間、文字通り寝食を忘れて三〇年間戦い続け、並々ならぬ努力の甲斐があつてトップにのぼりつめたそうです。

見ようとしなければ見えないものがある

しかし、そんな毎日ですから、身体が悲鳴をあげないわけがありません。

二〇一三年に、突然トイレで倒れて、救急車で搬送され、直腸の末期ガンと診断されました。「このまま放っておいたら余命二ヶ月」との宣告に、崖から突き落とされたような気持ちだったと推察されます。

止む無く、仕事を辞めましたが、腫瘍が大きすぎて地元関西で手術をしてくれる病院がなく東京で手術をしたそうです。放射線治療から手術と地獄のような治療が続きます。手術後にも「三年生きる確率は三〇パーセント」と言われたそうで、手術後は、抗がん剤治療による闘病生活が始まりました。そのわずか二年後には肺がんが発症。その後、緩解はしたものの、治療は続き、もしもまた再発したら五年生存率は五パーセントという、今もガンと向き合いながらの日々を送っていらっしやいます。

さらに彼がショックだったのは、入院を機に、周りから潮が引くように人が去っていったことでした。気がつくとも周囲には友達も誰もいない状況になっていたそうです。

保山さんは「病気で倒れたら、一人も友達がなくなった。それだけ自分が最低なやつだったのだ。」と、トッブカメラマンとして天狗になっていたこれまでの生き方を振り返ります。

抗がん剤の治療で体力のない保山さんですから、重いカメラを持って撮影に出かけることはできません。カメラのない生活、撮影ができない日々、だれも自分のことを気にかけていないという社会から孤立した日々。生きていく実感すら感じない世界で、自分が生きていくのか死んでいるのか分からない毎日：：当然ながら死ぬことも考えたそうです。

そんな絶望の日々の中で、最後に生きている実感がほしいと、強く思った保山さんは、残りの人生、撮りたいものを撮ろうと決意します。世界中の絶景を撮ってきた保山さんですが、原点は奈良。本当に撮りたいものは奈良だ

と気付いた保山さんは毎日、奈良の様々を撮り、編集して「奈良 時の雫」という三分ほどの動画にしてアップしました。

たった三分の動画の陰にどれだけの映像が、どれだけの工程があると思いますか？

朝、四時に起きて五時の始発電車に乗るそうです。どこに行って何を撮るかは、朝に外に出て空を見て、風に当たってから決めるとのこと。

こんな心を動かす映像をどうやって切り取っているのでしょうか。

撮影すると決めた場所にはできるだけ長く居ると話しておられました。長年の経験で自然への嗅覚は並外れています。空を見て雲の流れを読み、風を感じ自然と対話する。全身の感覚を研ぎ澄まして時を待つのでしょうか。そうすると「撮るなら今やで」って、花が話しかけてくるそうです。五感で感じてレンズを向けたくなる瞬間です。

そうやって撮影した映像を編集するのも時間のかかる仕事です。ガンと向き合いながらこれまで、おそらく千本前後の動画を撮ってこられたはずです。

「人生すべてが仕事潰けだった自分が、ガンになって全部失い、自分が本気でやりたいことを続けていたら、いろんな人に出会い助けていただいた」とおっしゃいました。映像と共に流れるBGMも人の輪から生まれています。そんな保山さん、ある理由からどうしても御蓋山にかかる虹を撮りたいと思ったそうです。待ち続け一〇日ほど経った頃、たった一〇秒ほどですが、薄い虹が掛かったのだそうです。他の人は誰も気付いてない、保山さんたった一人が目にするのできた虹。

そう、見ようとしていなければ見えない虹です。

見ようとしなければ見えないものがある

見ようとしなければ見えないもの。これは私たちの日常にもたくさんあるなあと思いました。もしかしたら、友達と同じものを見て、同じような経験を積んで共感しあっても印象に残ることは違うかもしれません。

意識の差が見えるものに影響しているという私の経験では、ごみ拾い活動の前後の例があります。今は自粛ムードでやっていませんが「早寝・早起き・朝ごはん運動」で早朝のごみ拾いに定期的に参加していた時、「落ちていくゴミは見逃さないぞ」と目を凝らして見つけながら歩きます。そうしたら、なんとゴミ拾いではない日に町を歩いていても「あそこに吸い殻!」「あつちにはペットボトル!」とゴミが目についてしょうがなくなったのです。自分自身、確かに見ようと思わないものは目にはいらぬし、逆に意識するものは目に飛び込んでくるものなのです。

何を見ようとするかどうかで見えるものも違ってくるのですね。同じ時を生き、同じところに身を置いても見ようとしなければ見えないのです。

さあ、皆さん、考えてみてください。

あなたは心の目で、何を見ようとしているでしょう。あなたは何を見て、心の糧にしようとしているでしょう。虹の話だけではなく、命と向き合いながら撮っていらっしやる保山さんのたんさんの映像から、私はそんなことを考えています。

(健康栄養学科准教授)